

白子キャンプを終えて

何が起こった？最終日のインドアコートからホテルへ引き上げるとき、泣きべそをかいてベンチから動かない子(小学1年生)をスタッフがなだめていました。聞いてみると「帰りたくない」でした。ひとまずホッと、総勢55名の「夏休みこどもキャンプ in 白子」、通称「白子キャンプ」から無事かえってきました。家庭に戻った子供たちの様子はいかがでしたでしょうか。

最大の楽しみ(スタッフが)である朝のビーチでのイベントが、直前までの台風の影響で、砂浜がえぐられており波も高く、挨拶の練習を太陽に向かってやっただけで、残念ながら海岸から引き上げ、変更した会場：テニスコートに向かいました。例年よりも早く起きてたくさん楽しむつもりでワクワク準備していただけにショックでしたが、テニスコートでのイベントにも文句ひとつなく、楽しんでくれたようです。

集団生活を行う中で「思いやり、助け合い、奉仕のこころ」が、のちのち嬉しいことや、自分自身を助けることにつながるという事を、たくさんのチーム対抗ゲームや食事の準備片付け、各部屋に分かれての自由行動や就寝準備などを通じて感じてくれた子供たちも少なからずいたと思います。

はじめて親と離れて、キャンプという団体行動を経験した子供たちも多く、何度も参加している先輩たちが布団の用意をしてくれたり、配膳をしてくれたり、身の回りの整理や探し物を手伝ってくれたりしたことに感謝の気持ちを持ってくれたことは間違いなく、先輩に対する尊敬や憧れの念だけでなく、日ごろは当たり前前に思っていた親のありがたさも感じてくれたり、少なくとも心のどこかに種として残っているはずです。

集団生活の中で、それぞれが自分の役割(できれば得意分野で)を持ち、助け合い協力して何かを成し遂げる。その過程で自分の存在価値を認識していればセルフイメージも高まっていくはずとの計画の中で、明らかに変化した子供が数名ですが見受けられました。また自分のことは自分ですべきとの認識を強めてくれた子供もたくさんいました。

このキャンプでスタッフ側としてあらためて強く勉強したことは、指導する子供たちが一番伸びるということ。お兄さんお姉さんの在り方から学ぶ低学年の子供たちが成長するのは当然ですが、思いやり、気配り、ルールやマナーについて叱咤激励をして、低学年を導いていくそのお兄さんお姉さんたちのほうがより成長していると感じました。

食事については、正直なところ大きな問題があります。生野菜を完食した子供は3名だけ。70%近くの子供が一箸も付けていない現状に寒気を覚えました。長年子供たちの運動能力やメンタルにかかわっていると解ることの一つに、生野菜がダメな子供はスタミナがなく我慢ができないことがはっきりしています。肉食に偏っている子には特にそれを感じます。是非とも家庭内で生野菜たっぷりが当たり前になるようお願いしたいところです。

今回のキャンプでも、ライブ配信なども含め反省点がいくつかありました。次回はもっと進化したキャンプをお届けしたいと今からふつつつと燃えています。今回が初めてであった方も2回目の方もさらに何度か続けられることをお勧めします。2度目3度目は、潜在意識への定着が倍々ゲーム的に効果が高まると信じています。

最後に、お子様と我々スタッフを信じて送り出してくれた親の皆様にご心より感謝申し上げます。